

H. N. ブレイルスフォード

「平等派とイギリス革命」

Henry Noel Brailsford: *The Levellers and the English Revolution*, edited by Christopher Hill. London, The Cresset Press, 1961. pp. xvi, 715.

浜 林 正 夫

I

H. N. ブレイルスフォードは1873年ヨークシャに生まれた。グラスゴウ大学を卒業したのち、同大学やクイーン・マーガレット・カレッジでしばらく教職についたが、すぐ教壇を去り、ジャーナリズムの世界にはいり、マンチェスター・ガーディアン、トリビューン、デイリー・ニュース、ネーションなどに寄稿していたが、30歳ごろから政治活動にはいり、1907年には独立労働党に入党した。この書物の序文のなかでも、かれは R. H. トーニーや G. P. グーチや E. ベルンシュタインを「わたくしの古い友人」とよんでいるが、これはおそらくこの時代からの交友なのであろう。1910年から12年までのあいだ、ブレイルスフォードは婦人参政権問題のための委員会の書記をつとめ、1913年にはバルカン問題についてのカーネギー国際委員会の委員となっているが、こういう政治活動のかたわら、1913年にホーム・ユニヴァーシティ・ライブラリ中の一冊として公刊した「シェリ、ゴドウィンとそのサークル」という書物が非常に好評を博し、ブレイルスフォードは文筆家としての地位をもまた確立した。

バルカン問題に関心をいただいていたブレイルスフォードにとっては、第一次世界大戦はとくに深刻な問題であつたらしく、1914年にかれは、「鋼鉄と黄金の戦争」という書物をあらわし、帝国主義戦争としてのこの世界大戦の本質をばくろし、それ以後もいろいろな角度から戦争と平和の問題を論じつづけていた。1918年、かれは労働党から国会議員に立候補したが落選し、その後ふたた

びジャーナリズムへもどって、1919年にはデイリー・ヘラルドその他の新聞の通信員として大陸にわたり、1922年から26年まではニュー・リーダーの編集長となり、また1937年以後は、ニュー・ヨーク・ニュー・リパブリックの定期寄稿者であり、また K. マーティンとともにニュー・ステーツマンの編集を担当したりした。

1920年代以降のブレイルスフォードの政治活動については不明であるが、一貫して植民地独立の運動と、平和と社会主義のためにたたかいつづけていたことは、この書物への C. ヒルの序文にもしるされているとおりであり、本格的な研究・著作活動のほかに、パンフレットによる啓蒙運動にも大きな足跡を残している。わたくしが知りえたかぎりでも、かれには次のような多くの著作がある。

- The Broom of the War-God (novel), 1898.
- Macedonia, 1906.
- Adventures in Prose (essays), 1911.
- Shelley, Godwin and their circle (H. U. L.), 1913.
- The War of Steel and Gold, 1914.
- A League of Nations, 1917.
- Across the Blockade, 1919.
- Socialism for Today, 1925.
- How the Soviet works, 1927.
- Olives of Endless Age, 1927.
- Rebel India, 1932.
- If we want peace, 1933.
- Property or Peace, 1934.
- Voltaire, 1935.
- Why Capitalism means War, 1939.
- Democracy for India (Fabian pamphlet), 1940.
- America our Ally, 1940.

ブレイルスフォードは1958年3月23日、85歳の長い生涯を終えた。そのあと

にかれば、完成を目前にひかえた大部の原稿をのこしていた。それをヒルが整理し出版したのが本書であるが、ヒルによればブレイルスフォードの予定では、このほかに四つの章が書かれるはずであった。そのうちディガーズにかんする章は、ブレイルスフォードが1945年に“プレイン・ビュー”という雑誌に書いたものを再録して補い、あとは欠けたままにされている。しかし、序文と結論にあたる章がないということを除けば、読んでみて、一冊の書物としてのまとまりに物足りなさを感じさせるものではない。

II

イギリス革命における平等派は、長いあいだ無視あるいは軽視されてきた党派であった。クラレンドンやヒュームやカーライルなどにおいてはもちろんのこと、ウィリアム・ゴドウィンにおいてさえ、平等派はきわめて簡単に言及されているにとどまり、S. R. ガードナーによっても正当な評価をうけているとはいいがたい。平等派を真正面からとりあげたのは、よく知られているように19世紀末の E. ベルンシュタインであったが、その後、ドイツおよび1920年代のソビエトにおいて若干の研究があらわれたのみで、イギリスで L. H. ビアレンズのディガー研究、アメリカで T. C. ピースの「平等派運動」が公刊されたにとどまり、平等派にかんする研究が本格化したのは1930年以降のことにぞくするといつてよいであろう。ベルンシュタインの書物が H. J. ステニングによって英訳されたのは1930年のことであり、つづいて J. W. ゴフが1931年の“ヒストリ”誌上で人民協定にかんする研究を発表し、また1939年には H. ホロレンショーの「平等派とイギリス革命」が出版された。第二次大戦中 W. ハラーや D. M. ウルフによる平等派史料集の公刊があり、戦後 M. A. ギブによるリルバーンの最初の伝記が1947年にあらわされ、1955年に J. フランクの「平等派」が出版されてから、ようやく平等派研究はベルンシュタイン的水準をこえようとしているが、しかしリルバーン以外の平等派の指導者ウォールウィンやオーヴァトンについてはまだ伝記さえなく、リルバーンについても全集や選集はなく、その著作を読もうとすれば、史料集に収められたもの以外は、ブリティッシュ・ミュージアムその他の貴重なコレクションにたよらざるをえな

い現状である。⁽¹⁾

ブレイルスフォードのこの書物は、もちろん以上にあげたような研究成果を利用しながら——ただし J. フランクのものは利用しえなかつたらしい——かれ独自の視点でこれを整理し、原史料を豊富に駆使しつつ、80歳の老人とはとうてい思えないような熱情をもって、平等派運動を再現したものである。編集者ヒルの序文によれば、これは「たんなる歴史であるにとどまらず、ふかい政治的研究なのであり、かれが後世に伝えようとするメッセージ」(p. v) なのである。ブレイルスフォード自身もまた、その序文の冒頭に「平等派を再発見するという幸運がわれわれの世代の手におちてきた」(p. xi) とのべている。それではこの老闘士は、平等派研究をとおしてわれわれ若い世代に何を語ろうとしているのか、そしてその平等派研究はこれまでの研究に何をプラスしているのだろうか。

本文だけで700ページ近い、35の章からなるこの書物の内容を、簡単に要約することはきわめて困難であるが、思いきり大ざっぱに紹介するとすれば、こういうことになるだろう。

第1章はイギリス革命全体の性格を論ずる。「経済的不満からは戦争 (= 革命) は生じない」(p. 2) という言葉からだけみると、著者は階級闘争史観を否定しているように思われるかも知れないが、著者がここで経済的不満といっているのは、税金や独占やその他の直接的な経済問題をさしているのであって、全体としてイギリス革命をブルジョア革命あるいは階級闘争とみる基本的な視点は、第1章のなかで十分にあきらかである。ただしそのことのために、宗教問題の重要性を軽視するという偏狭さはみられない。もう一つ注意すべきことは、イギリス革命を階級闘争とみる場合、著者がこれを土地所有をめぐる争いとして理解しつつ——「問題の焦点はイングランドの土地の所有権であった」(p. 11)——この争いのなかに農民を登場させていることである。イギリス革命は、ブルジョアジーに土地を与えたが、耕作農民には土地を与えなかつた、そ

(1) ただしソビエトでは1937年にセメーノフによってリルバーン著作選集が出版された。なおヒルによれば、われわれはきわめて近い将来に、P. グレグのリルバーン伝と C. B. マックファースンの平等派研究を入手することができるらしい。

ここにフランス革命との大きな差がある。そして農民を解放しえなかったこの革命は、イギリス人民に対する新しい抑圧のはじまりにほかならないのである。クロムウェルはイングランドを、それ以前より、「より良くもより幸福にもしなかった」(p. 16)。「悲劇はクロムウェルが平等派を弾圧しえたことにあるのではなく、むしろ、フランス革命のころロンドン通信協会の急進派が結集されるまで平等派のあとをつぐものがなかったことにある」(p. 15)。ブルジョア革命をブルジョアジーの勝利としてではなく、農民の敗北としてとらえるこのブレイルスフォードのイギリス革命観が、このかれの平等派研究の基調をなすのである。

第2章と第3章とは、革命期の諸党派を宗教思想との関連において分析し、長老派、独立派、再洗礼派、諸セクトを論じているが、そのかぎりではとくに新しい解釈や観点はない。ただこういった宗教的背景、とくに再洗礼派の伝統、をぬきにしては、平等派の理解は不可能だということが、とくに強調されている程度である。第4章、第5章、第6章はそれぞれオーヴァトン、ウォールウィン、リルバーンという三人の平等派の指導者の経歴と思想を分析している。ブレイルスフォードによれば、オーヴァトンは再洗礼派の伝統をうけつぎつつ、これを合理主義の方向へ発展させたものとされ、したがってたとえば1644年の「人間の死滅性」という有名なパンフレットについても、これを無神論ないし唯物論的見解とみるベルンシュタインなどの解釈をしりぞけ、むしろ再洗礼派の伝統にたつものと解している。⁽¹⁾ウォールウィンはルネサンス・ヒューマニズムの流れをくみ、理神論への方向をしめすものとされているが、この解釈は妥当であろう。ただここで1649年に出版された「ティラニポクリット」(Tyranipocrit)というパンフレットの著者をウォールウィンと断定していることは注目にあたいする。しかしこの断定にどれだけの根拠があるのかは不明であり、——このことを論証しているはずの附録Aは見当たらない——やや軽卒

(1) この問題については cf. W. Schenk, *The Concern for Social Justice in the Puritan Revolution*, London, 1948, App. A. ブレイルスフォードの解釈はシェンクのそれに近い。

の感がしないわけでもない。⁽¹⁾ リルバーンをカルヴィニストとしてとらえている第6章にはとくに問題はないように思われる。

第7章は1646年7月の「数千の市民の抗議」をもって、政治勢力としての平等派の成立を劃し、その内容、階級的基礎を分析し、またこの時期のリルバーンの著作を分析しながら、かれが再洗礼派的な「宗教的寛容と人間の平等性という二つの基調」(p.120)にみちびかれて、カルヴィニズムのもつ限界を突破し、「世俗的共和国」(p.120)の理念に到達した過程をたどっていく。なおこの章の注のなかでブレイルスフォードが、「ノーマンの軛」の思想のはじまりをジョン・ヘアにもとめる見解を批判し、さらにヘアの反ノーマン主義には何らの社会的意義はないといっている(p.141)のは、この書物の編集者ヒルの主張に対する批判的な問題提起といえるであろう。第8章はニュー・モデル軍の特徴的な性格を論じ、第9章はクロムウェルの思想、とくにその選民思想をあつかい、これへの抵抗のうちに、平等派の指導をうけた軍の兵士たちが情勢をリードしていく1647年の段階を、第10章で論じている。ブレイルスフォードはアジテーターをロシア革命のときの労農兵士ソビエトになぞらえつつ、この段階で情勢を動かしていたのは独立派ではなく、平等派および兵士であったことを力説し、第11章で、このような動きのなかから生みだされた軍の政治綱領「提案要綱」を分析して、これにきわめて高い評価を与えている。もしこの提案要綱の線で「国王の復位がおこなわれていれば、イングランドはまず全体主義的独裁と、次に後期ステュアート王朝のもとでの28年間の反動とによる苦しみをまぬかれたことであろう。軍が1647年に提案したものは、この国がウィッグ革命でようやく獲得したものより、くらべものにならぬほどリベラルであった」(pp. 241—42)。クロムウェルやアイアトンが宗教的寛容の原則を提案したのはこのときだけであり、そこにも再洗礼派の思想が大きく影響していると考えられる。しかし長老派の反撃をうけてこの提案要綱は実現されない。そしてこの失敗に対する怒りと不満とから、「人民協定」が生みだされるのである。

(1) ラスキもウォールウィン説であるが、ザゴリンはこれを批判している。cf. P. Zagorin, *A History of Political Thought in the English Revolution*, London, 1954, p. 59, n.1.

それは「民主主義の歴史における成文憲法の最初の草案」(p. 255)であり、1789年のフランスをこえ、1947年のインドにいたるまでも影響を与えたといわれる。第12章がその内容を分析している。第13章はパトニ会議の討論の紹介であるが、その内容については A. S. P. ウッドハウスの編集した史料が容易に読みうる今日ではとくに目新しい点はなく、ただここでの兵士たちの主張を没落小生産者の立場をあらわすものと規定している (p. 279) のが注目される程度であろう。第14章は平等派と兵士たちの叛乱をあつかい、クロムウェルがみずから剣をぬいて馬をのりいれ、その鎮庄にあたったというのは、事実ではなく、作り話にすぎないと通説を批判しているのが、注目される。

第15章は事実の流れを追うことをしばらくやめて、平等派の組織を論じている。ブレイルスフォードによれば、平等派は、「民主的に組織された政党の最初のモデル」(p. 309) とされ、「合衆国の共和党と民主党、ヨーロッパの自由党や社会党、アジアではインドの国民会議派——これらすべては、リルバーンとその仲間たちがはじめてつくりあげた型にしたがっているのだ」(p. 309) とされている。平等派をこのような政党組織として分析し、その活動を追求した研究は、わたくしの知るかぎりではほかになく、こういう視角にはやはり政党人としての著者の特徴がうかがえるように思われる。平等派の政党組織はまず全国的な署名運動にはじまり、つづいて、週3ペンスとか6ペンス、せいぜい半クラウンの定期カンパの徴収へと発展し、居住地単位の組織がつくられ、代議員がえらばれる。国会請願はその直接的効果よりも大衆運動としての効果を狙ったものだ、とまでいわれると、これはまったく、今日の日本の政党の動きを分析されているようにさえ、思われてくるであろう。平等派はまた婦人問題にかんしても先駆的であり、その無名の婦人活動家たちは「メアリ・ウールストンクラフトの先駆者とみてよいであろう」(p. 317)。

第16章から第18章までは、1648年はじめから第二次内戦をへてプライドのページにいたる約一年をあつかっているが、ここでも平等派がイニシアティブを握っていたことが、ふたたび強調される。そして1648年1月の「請願」や、9月の「大請願」などの平等派文書を分析し、それらにふくまれたいくつもの新しい要求を高く評価しつつ——たとえば48年1月の請願には賃金ひきあげの要

求があるが、これは賃上げ要求としてはイギリス最初のものであろう (p. 323)——しかし平等派の致命的な欠陥として農民対策の欠如が指摘される。この点は、先にのべたように農民の敗北としてイギリス革命をとらえるブレイルスフォードの基本視点と結びついて、この書物をつらぬく主張の一つとなっていることなのであるが、ここでは次のようにいわれている。「もし平等派がそのすぐれた宣伝能力をもつて、選挙権拡大ののちに、農民解放のためのこの提案に集中しえたならば、これ以後のイングランドの歴史はまったく異なった経過をたどったであろう」(p. 330)。

第19章は宗教的寛容の問題について、平等派と独立派の違いを強調している。平等派のそれは、再洗礼派の伝統とヒューマニズムの流れをくんだ合理主義の立場のものであり、寛容の主張においてミルトンやロックよりもすすんでいたとされるが、独立派、とくにクロムウェルの立場は、決して原則的な宗教的寛容論ではなかった。歴史家がクロムウェルに宗教的寛容のパイオニアを見出すのは誤りであって、クロムウェルのそれは、「その仲間のピューリタンすべての連帯感」であり、「聖徒の連帯性」(p. 399)なのである。第18章では、クロムウェルは人民主権を信じない「神政主義者」(p. 365)とされているが、こういう点で独立派の独裁的傾向を強調し、平等派との差をうきぼりにすることもまた、この書物をつらぬく主張の一つであるように思われる。第20章は平等派の機関紙といわれる“モダレート”の分析にあてられ、第21章で平等派と農業問題が論ぜられる。ここではすでにのべたように、平等派における農民問題の無視ないし軽視がくりかえし強調され、平等派的な民主主義の主張は土地所有の民主化にささえられなければならなかったのだとされる。そのためには、平等派はたんに膳本土地保有の廃止をとるのみでなく、さらにすすんで農村へオルグを派遣し、農民の要求をとりあげ、その組織化をくわだてるべきではなかったか。平等派の農民問題へのとりくみは結局きわめて中途半端であり、農村平等派をうみだしはしたものの、「農村をかれらの固い同盟者として動員する」にはいたりえず、この失敗こそが、また「かれら自身の敗北のほんとうの原因」(p. 450)であったのだ、とされる。

こうして第22章以下は、共和制およびプロテクター政権のもとにおける平等

派の解体過程をたどることとなる。まず第22章は国王の死刊とそれに対する平等派の指導者の態度を分析し、第23章と第24章は共和制を「恐怖政治」(p. 469)と断じつつ、それへの平等派の抵抗をあつかい、第25章はアイアランド侵略に反対した平等派のたたかいを、「国際道義の新しい考え方——文明のおどろくべき前進」(p. 498)とよび、またそこにアフリカやインドなどの民族解放運動の先駆を見出している。第26章はバーフォードにおける平等派の蜂起とその鎮圧を、第27章は1649年5月の人民協定の内容分析を、第28章は「ウォールウィンの悪意」にみられるウォールウィンの特異な思想の分析を、それぞれあつかっているが、いままでにふれてきたこと以外には、とくに問題とすべきこともないように思われる。第29章から第31章までは、リルバーンの最後の抵抗と投獄、裁判、亡命、そしてクェーカーへの転向を、くわしくえがきだしている。第32章以下は、平等派の影響をさぐりながらその他の党派との比較をこころみたもので、まず第32章は平等派の解体過程をなお追求しながら、そののちに生まれてくる第五王国論とクェーカーをとりあげ、宗教的神秘主義をもった点で平等派とはあきらかに異なりながら、かれらが社会改革の要求では平等派から多くをうけついだことをしめそうとする。「クェーカーは平等派の炬火を新大陸へうつしたのだ」(p. 640)。第33章は独立派の典型的な思想家としてヒュー・ピーターズをとりあげ、政治思想における差異にもかかわらず、やはり平等派から多くの影響をうけていることがしめされる。とくにピーターズが農業問題にかんし、一時金の固定化や忠誠誓約の廃止などを主張したことは「平等派の圧力」(p. 652)によるとされる。しかし、第五王国論者やクェーカーに平等派の影響をみることは正しいけれども、独立派の農業改良の主張に平等派の圧力を想定することには問題が残るであろう。いまここでこの問題をくわしく論ずる余裕はないけれども、独立派の内部には平等派とは異なった農業改良の主張があったのであって、ピーターズや M. ヘール委員会の報告には、平等派の圧力よりも独立派内部の農業改良論の反映をよみとるべきではなからうか。⁽¹⁾

(1) 詳しくは浜林正夫「イギリス市民革命史」(1959年、未来社) pp. 232~239参照。
なお、ヒュー・ピーターズを、ブレイルスフォードのように、「ピューリタン革命の典型」(p. 642)とみてよいかどうか、わたくしには疑問である。

第34章はディガーズをあつかい、ウィンスタンリの思想分析に多くのページをついやしているが、はじめにのべたように、この章は本書の一部として書かれたものではないために、平等派との比較があまり明白ではない。しかしウィンスタンリを、汎神論的神秘主義の立場を基底としつつ、合理的な社会批判にたったものとみているのは、正当な理解といえるであろう。最後の第35章「ボルドーの赤旗」は、「イギリス革命を輸出しようとしたただ一つのくわだて」(p. 690)として、セックスピィらによって、ボルドーのユグノーへ人民協定がもちこまれた経過をえがいている。

III

以上がこの書物のごくおおまかな内容と、いくつかのこまかい問題点であるが、全体をつうじてうかび上がってくるこの書物の特徴的な考え方をもう一度まとめてみると、次の四点にまとめることができるであろう。

まず第一に気づくことは、この平等派研究を支えているブレイルスフォードの現代的関心のするどさである。それは平等派をたんに歴史上のものとみるのではなく、われわれがうけつぎ、われわれが発展させるべき先駆者としてえがきだす立場であり、まさにこういった立場から平等派の欠陥をえぐり、その業績を評価するのである。したがってここには、過去はそのようなものであり、それ以外ではありえなかったのだという、とりすました悪しき客観主義はみられない。おそらくこのことがこの書物の最大の特徴であろう。

第二にイギリス革命史に対する新しい問題提起と考えられるのは、1647年から49年の段階における平等派の勢力への高い評価である。もちろんこの時期に、平等派が大きな勢力をもち、独立派の動きに一定の影響を与えていたことは、今日ではイギリス革命史の常識であるが、しかし、たとえば「提案要綱」に平等派の影響をみてこれに高い評価を与え、その挫折ののちに「人民協定」が提起されるという理解の仕方は、「提案要綱」と「人民協定」とにそれぞれ独立派と平等派の要求をよみとってこの両者の差をうきぼりにしようとするふつうの革命史理解とは、かなり異なっているといわれなければならない。1649年ごろには、一時的にもせよ、「平等派は最大の党派であり、最善の組織をもつ

ていた」(p.13)と、ブレイルスフォードはいうのだが、こういう理解は、歴史的な事実と反する過大評価ではないのか、どうか。たしかに平等派は、当時としてはきわめてよく組織された党派であったろう。しかしそのことからただちに平等派の情勢指導力の大きさをみちびきだせるのか、どうか。わたくしはやはり、ブレイルスフォードには平等派に対する過大評価があるように思われるのだが、このことは次の特徴と無関係ではないであろう。

第三にいえることは、独立派の反動性、独裁的傾向がしきりに強調されていることである。このことはすでに指摘したので、くりかえしは避けるが、たとえば共和制からプロテクター制への革命政権は、「ピューリタン・ファシズム」(p.223)とさえよばれるのである。それを思想的に支えているのがカルヴィニズムであり、これをつきやぶるのが、再洗礼派とヒューマニズムだといわれるのであるが、このように独立派の反動性が強調される結果、独立派が宗教的寛容なり政治的民主主義なりを主張すると、これをすべて平等派の影響ないし圧力によるものと解せざるをえなくなる。平等派への過大評価は独立派の——その進歩性の——過小評価とウラハラの関係にある。しかしブルジョア革命におけるブルジョアジーの進歩性を、まったく無視してよいかどうかは、重要な疑問として残らざるをえない。このことは、ブルジョア革命をブルジョアジーの勝利としてではなく、農民の敗北としてとらえるブレイルスフォードの歴史観につながるものであるが、思想史的にも、カルヴィニズムを神政的側面だけでとらえることは誤りであろう。この誤りは一方ではヒューマニズムのもつ日和見主義的側面を見落とすという誤りにつながり、他方では、カルヴィニズムが、それ以外の革命的イデオロギーと共通してもっている集団規律的な、超個人的必然論という性格を、正しく評価しえないという欠陥へつながっているのである。もっとも、ピューリタニズムを個人主義とみ、ヒューマニズムと並列的に考える通俗的な理解をこえ、ブレイルスフォードはピューリタニズムの集団規律的側面を正しくとらえてはいるのだけれども、かれはこれを反動性としてしかとらええない。この理解の仕方はまさに、ソビエト社会主義をファシズムと同じ全体主義としてしかとらええない社会民主主義者に特徴的なものであり、この書物のなかでもブレイルスフォードがカルヴィニズムをマルクス

主義になぞらえ、(pp.162, 366), ソビエトの選挙制度を、「無意味な儀式」(p. 266) といっているのは、そのあらわれであろう。しかしこういう理解こそが、ブルジョア自由主義と民主主義の所産にほかならないのではなからうか。

最後に第四にブレイルスフォードのイギリス革命観が特徴的である。フランス革命と違ってイギリス革命が農民的土地所有を生みださなかったという点については、ほぼ異論はないであろう。問題はその評価の仕方にある。わが国におけるふつうの理解の仕方と同じように、ブレイルスフォードもまた、そういう農民的土地所有が資本制生産の発展に阻害的であり、「歴史を逆もどりさせる」(p. 442) ものであることを知っていないわけではない。しかしそれにもかかわらず、かれはイギリスがその後にとどった資本主義的発展の大きさをまったく評価せず、資本制生産の発展を犠牲にしても、農民的土地所有の確立とそれを基盤とする小市民的デモクラシーこそ、イギリスがとるべき途であったと主張する。かれはこう書いている。「人民協定を基礎とするイングランドがもし生まれたとするなら、それは奴隷貿易で豊かになったり、インドを征服したりはしなかったであろう。そしてそれはささやかな規模の州や教区を単位に、無知と貧困にうちかつことに成功しただろう。自由に考え、自由に討議する個々の市民の生活と個性にあらためて尊敬をほらいつつ、それは中立のスイスのような洗練された文化を発展させえたであろう」(p. 491)。ここには徹底した反資本主義の精神がある。ブレイルスフォードの歴史解釈の規準は、資本主義の成立と発展ということにあるのではなく、一貫して個人の尊厳と人間の平等と民主主義とにあるのである。

しかしブレイルスフォードのこういう資本主義批判を読みながら、わたくしは E. フロムが大衆社会の克服を小集団における人間性の回復にもとめたことを、思いださざるをえなかった。大衆社会的状況をサークル主義では克服できないのと同じように、帝国主義国家をスイスたらしめようという著者の願いは、憧れにしかすぎない。平等派をうけつぐものは平等派的小市民性までもうけついではないのである。